

コンピュータ技術の隊員として「できること」とは

石郷 則晃

(17-1, ニカラグア, コンピュータ, 埼玉県立いずみ高等学校)

派遣前と同じ職場でいずみ高校というところで、情報教育、ならびに環境教育を担当しております。平成 19 年 3 月末に帰国してすぐに職場に復帰したわけですが、現在のところ、高校 1 年生の担任をさせていただいている状況にあります。周りの周囲の先生方は 1 年位のリハビリ期間を置いて少しゆっくりしたらどうかという話もあったのですが、無理を言って担任をさせていただいている状況になります。採用以来 9 年間同じ学校になりますので、そろそろ人事異動の声がかかるかもしれないと思っております。

私は、ニカラグア共和国というところの、国立自治大学マナグア校というところの、情報システム及び研究開発センターで、主に大学内のネットワークの運用助言と国際インターネット回線網の運用助言を行っていました。この、国立自治学校マナグア校というのは日本で言うところの東京大学と同程度の大学であったらと思います。

少し話はずれますが、ニカラグアの公教育制度についてお話したいと思います。初等教育が 6 年、中等教育が 5 年、大学が 4 年という風になっています。修了試験というものを受けて合格しないと進級できない状況になっておりますので、15 歳で初等教育の 2 年生ということもありました。また、学校へ行くためには学費が必要な状況でもありましたので、多くの子どもたちが学費を払えない状況にありまして、学校へは行っていないような状況でありました。学齢期の子どもでも生きるために働かなくてはいけないという現状を見てきたわけです。今、画面に出ています写真はごみの採集処分場で資源ごみの回収をしている子どもの写真です。私はコンピュータ技術という職種で派遣されていたのですが、職種以外の活動として同じ隊員の間でニカラグア教育委員会という組織を作りまして一日本人として現地の子どもたちのために何ができるのかなということを考え、行動するというようなこともやってきましたので、その一例としてこのごみの採集処分場の見学というものを行いました。そのときの写真になります。それぞれが、生きるために必死な状況にあるということです。すべての子どもが分け隔てなく学校に行くという状況が望ましいとは思いますが、実はそうではなかったということです。これが開発途上国の現実というものなのかな、とも思いました。

続いて、私は配属先の情報システム及び研究開発センターという部署で何を行っていたかのかについて少し説明してこうかと思います。学生を相手に講義を行うということはほとんど無く、大学職員や教授陣を相手に国際インターネット回線網の運用に必要な助言などをすることが主な活動でした。学生を相手にするわけではなかったの

で、少し寂しいところはあったのですが、こちらから研究室を訪ねていくこともかなり多かったので、自然と交流が持っていたのかなと思っています。コンピュータネットワークシステムの設計書であったり、仕様書、運用マニュアルらしいものはある程度はあったみたいですが、そのほとんどは彼らの頭の中にあるという状況ですので、担当者がいないと何もできない状況でした。さらにそのようなシステムが壊れてしまうと新たに手探りで作り直すという状況でしたので、かなり大変な状況でした。

私が主に担当してきたのはネットワーク監視システムの構築の手順書の作成でした。システムといっても各パーツごとにわけると 10 以上になります。またこれらのパーツを決まった順番で準備しなくてはいけないので、彼らが頭の中で理解しているだけでは、十分ではなかったわけです。ですので、スペイン語、現地はスペイン語なのですが、スペイン語で手順書を作ることになりました。スペイン語の手順書を作るために配属先のメンバーにいろいろと話を聞きながらスペイン語の表現を探るということは日常的に行っていたのですが、十分とはいえなかったために活動を開始してから半年経ったあたりで、スペイン語のレッスンに週 2 回 1 時間ずつ通うことになりました。スペイン語の先生が偶然にも大使館に出入りしている方だったので日本人の求めている表現に的確に答えてくださったので、非常に勉強にはなりました。技術的な問題で行き詰ることは無かったのですが、言葉の壁というものは非常に厳しいものだったのかなと思います。継続して学習していかないと十分な活動が行えないとも感じました。最終的に、活動とは関係なく帰国 2 日前まで語学の先生との語学のレッスンというものをしておりました。今となっては活用する場はほとんどないのですが、当時は語学学習というものにはまっていたという状況だったのかなとも思います。それだけ、プレッシャーになっていたのだなとも思います。

私には、一般的にカウンターパートという職場の現地人のパートナーはいませんでした。その代わりに、活動先のセンターに在籍している 6 人の現地人が私のカウンターパートの代わりになるのだと JICA の事務所のほうからは事前に説明されていました。活動を始めてわかったことは、各メンバーとの関係が 1 対 1 では無かったので、彼らにとって責任というものが中途半端なのだなと感じたことです。また、活動場所がそれぞれ個室でありまして、個室が割り当てられていましたので、彼らは活動スペースに閉じこもってしまい、情報交換というものには一般的にいう電子メールもしくはチャットというものを使う状況で、活動場所においての会話がほとんど無かったという状況でした。朝「おはよう」という挨拶を交わしてから、帰りがけに「さよなら」という挨拶をする以外会話がないう日も珍しくありませんでした。人との交流の少ない部署であったのは、とても寂しいことでした。情報システム及び研究開発センターというところに在籍しているメンバーの 6 名はその全員が大学の OB であり OG でありました。私より年齢の低い方も 2 人含まれており、平均年齢は 33 歳くらい、とても責任感が強いグループであったので、担当者一人で抱えてしまうことも多く、一見、分担されていてバランスがいいようにも見えたのですが、その人がいないと何もでき

ない状況になったりしているグループでした。常に最新の技術を導入したいというのは、どこの国でも同じであるのかなと思うのですが、基本的なことを理解しないまま応用になってしまうような場面も多かったと思います。基礎基本に忠実に従えば発展的な内容にも対応できると私は考えていたのですが、その基礎基本がしっかりと理解できていないような状況で、応用を行おうとするわけですから、ばかばかしいかもしれないようなことから、ともに勉強しなোসような状況でした。専門的な用語も入ってくるのですが、一例を示していきたいと思います。

コンピュータネットワーク上に設置されているサーバというものに動作が不安定な状態になっていきますと、ネットワーク全体にストレスがかかるようになりまして、放置しておくともネットワークが動作すらしなくなるわけです。復旧にも時間がかかってしまうので、事前に察知して手当てするのが一般的なのですが、各サーバは動作報告という動作記録を自分自身に保存しているような状況です。サーバの台数が少ないならば、各サーバの動作記録を手動でチェックしてもかまわないのですが、ネットワーク機器を含めて数十台から数百台になりますと、このログチェックというのがとても面倒になります。ですので、このログチェックというものを自動で行うサーバを新たに設置することにします。こうすれば一元で管理できるのでとても楽になります。しかしログの読み方を知らなかったり、ログの持つ重要性を認識していなかったりしますので、ネットワークの管理の重要性から説明をしまして動作ログの読み方という初歩的な状態まで戻ってともに勉強しているような状態になりました。

私の活動についてまとめていきたいと思います。マンパワーとして期待されていた部分が大きかったかなと思います。教授のかわりに後期の分の講義を持っていただけないか、なんていう話もありました。しかし一職員として働くことは簡単だったんですが、あくまでも協力者であるというスタンスは守りたかったので、みんなで考えてともに方向性を考え出し、一緒に作り上げていくということに徹してきました。手本は示すのですが、実際にやるのは現地の人、という状況です。また高度な提案もいろいろあったのですが、彼らの力量や必要性を考えて、今後彼らの力だけでやっていけるかを一緒に考えて、欲張らないということをモットーに活動していきました。彼らのサポートをしているに過ぎないということです。欲張らずに、ということです。

職種コンピュータ技術として派遣されていますと、活動以外でいろいろと問題があることがありました。一緒に行っている隊員への対応です。ほぼ全員がノート型コンピュータを持参してきているわけですから、そういう状況で質問が一極集中する状況でした。隊員のための隊員なのかなとも思いました。たとえばですが、デジタルカメラの画像がコンピュータに取り込めないような状況ですとか、プレゼンテーション用のソフトの使い方がわからないだとか、大切なデータを誤って削除してしまったとか、ハードディスクが壊れたので治して欲しいだとか、このような連絡が、当たり前のように私のところに来るわけです。時間も場所も考えず、朝5時に携帯電話に電話がかかってくることもありました。ニカラグアの隊員は多いときで60名程度でしたが、

コンピュータ技術の隊員は2人ほどしかいませんで、さらに私は首都で活動していたので、事ある度に私に連絡が来るような状況でした。私から客観的に見て言えることは、背伸びをしないで、欲張らないことでした。現地の人の視点に立てば、コンピュータというものは必ずしも必要なかったりします。コンピュータを使うことよりも、もっと原始的な部分で、活動で勝負をかけるべきかなと思いました。ですから、自分にできる範囲で活動を行って欲しいと私は願っています。しかし、活動中も報告書の作成であったり、活動の報告会であったり、そのような報告会などではコンピュータを使わなければならないこともありますので、必ずしもコンピュータ抜きというわけにもいかないのかなと思います。

簡単なのですが、安全対策ということについてお話をします。一般的にはニカラグアでは路上バスは安全対策のために乗らないとか、タクシーはタクシー強盗対策のために避けるだとか徒歩は路上強盗が出るので歩かないでほしいとか、そのように言われていました。要は、外出の際は細心の注意を払って行動するしかなかったわけです。残念なことながら、私は路上強盗にあってしまいました。原因は、歩いてはいけな地域を人の少ない時間帯に1人で歩いてしまったからです。荷物を取られただけで大きな怪我もなくよかったのですが、現地の事務所からは強く指導されました。中米のほとんどの国は携帯電話使用可能であって、ニカラグアも例外で無く、隊員に安全対策のために現地事務所から貸与されるような状況でした。学生デモが首都のあちらこちらであったときなどは、毎日のように携帯電話に連絡が来るような状況でした。

現地のインターネット環境について簡単にお話をします。パーソナルコンピュータやインターネットというものは大変高価なものなのですが、一般的なものではありません。利用する人が裕福層だけという状況に限ってしまっています。インターネットカフェが数多く点在していますので、そのようなものを使っていく状況にあります。日本語が使える環境がないので、自分で整えていくしかないのですが、私の場合は大学の研究開発センターの中でインターネット一日中使い放題という状況でしたので、まったく無縁でありました。ほかの多くの国も同じようにインターネットカフェ形式で利用ができると聞いています。

最後に、現職派遣制度を利用して派遣されたにもかかわらず、現地では大学の研究開発センターというところにいるだけであって、教育活動を十分に行っていなかったことに対して、今でも派遣制度を使って行ってしまったことがよかったのかどうか、疑問が残っています。ただ毎日コンピュータの前にいるだけで人を相手にすることもかなり少なかったわけです。活動の終わりが迫ってきたころ、ストレスから集中ができないような状態が1週間ほど続いたこともありました。結果を残そうと焦ってしまったからかもしれません。すぐに結果の出ないようなことをしているのだと言い聞かせて、ある程度気が楽になったわけなのですが、日本と違った環境で生活するので、最初のうちは見ているもの感じているものが新鮮に思えると思います。そのような新鮮に思えるうちにいろいろと記録に残すことも重要かなと思いました。私自身

は写真に撮ったり記録に残すことを余りしなかったもので、実のところ、写真は他の隊員よりも少ない状況にあります。帰国後の文化紹介などで使う写真にも困るような状況ですので、気がついて、新鮮だな、これ日本にないなと思ったときには写真に撮るような習慣があればよかったかな、と私自身反省しています。

私自身首都にいたことが多かったので、ほかの隊員とともに時間を持つことも多かったわけですが、できれば、現地の人と多くの時間をもっともっと過ごすことができたならよかったな、と少し残念な気持ちでいっぱいです。ほかの隊員と違って、ほかの国の隊員と違って、ホームステイ形式でしたのでに現地の人と一緒に生活する状況でしたので、ある程度の交流は毎日のようにあったわけです。このような派遣前訓練を含めて貴重な 2 年間を与えてくださったことに対して感謝の気持ちでいっぱいです。今の私にできることというのは、この 2 年間の話を伝えて、さらに皆さんに情報提供することぐらいしかできませんので何かありましたらまた声をかけていただければと思っています。以上です。